

平木遺跡

平木・萩野を歩く

匝瑳探訪

—78—

平木(平和地区)区は市内南部の平坦地であって共興地区に接し、海岸線まで直線距離でおよそ4キロの位置にあります。

昭和63年開校の県立八日市場特別支援学校建設にあたり敷地の発掘調査が行われ、住居跡や文字の書かれた土器(墨書土器)が発見されました。そのうちの一つに「遠田」

の文字があり、これが現在の宮城県北部にある「遠田郡」に関連するのではないかと研究者が関心を寄せています。

遺跡はおよそ750年から800年代後半にかけて生活が営まれたとされます。物部匝瑳氏が東北地方の蝦夷征討に活躍した時代とも重なり、この平木遺跡が九十九里から陸奥国(東北地方)に至る拠点であったのではないかとみられています。物部匝瑳氏は匝瑳郡を建てた古代氏族で、政府の東北政策を推進しました。

物部匝瑳氏が京都に移った後、市域南部地域は匝瑳南条荘として紀州(和歌山県)熊野神社の荘園となりました。いつごろから熊野神領となっただかわかりませんが、1000年以降全国的に熊野信仰が広まったとされることから、この時期すでに神領だったと考えてよいでしょう。

1190年ごろから千葉氏の流れをくむ椎名氏が平木地

域周辺に進出してきました。同区の御門は中世の土豪屋敷とみられ、星宮神社がまつられているので進出当時から中心地であったといえます。

1272年前後に、荘園を管理する熊野神社側と椎名氏とで新田開発をめぐる争いが起きました。当時の幕府が椎名氏側に有利な裁決を下したこともあり、開発がさらに進み周辺に集落がで始めたのみられます。

平木の語源が「開く」に通じることから新開地や開墾地のこととされ、地域の形成に伴う地名と考えられます。

平木区域にあたる江戸時代の平木村は400年ほど前の「村切り」によって村域が確定し、御門・中才・山・初内・原などの集落からなり、信仰活動などは集落ごとでした。

隣接する萩野区も、同時期に村域が定まったようです。江戸時代の集落は字本郷と向からなり、当時の記録や石造物には請け負った石工が間違えたものか、「萩野村」との表記も見られます。現在も熊野神社がまつられていて、熊野神領との関連が考えられます。

岡秘書課広報広聴班

☎73・0080



平木遺跡の所在地(八日市場特別支援学校)